

学外ボランティア事業に参加した学生の学び 東日本大震災後の復興支援ボランティアスタディツアーからの報告（第二報）

Learning of the Student who participated in off-campus volunteer enterprise.
— The report from the reconstruction assistance volunteer study tour
after the Great East Japan Earthquake. (The second news) —

酒井 康江* 丸山 智子* 松尾 和枝*
Yasue Sakai Tomoko Maruyama Kazue Matsuo

奥野 由美子* 金田 俊郎* 青木 奈緒子* 森中 恵子**
Yumiko Okuno Shunro Kaneda Naoko Aoki Keiko Morinaka

本研究は東日本大震災後の復興支援ボランティアスタディツアー（以下、事業）半年後の学生の語りを通して、事業が思考や行動にどのような変化をもたらしたのかを明らかにしたものである。また事業のどのようなことがきっかけで、それらの変化をもたらしたのか明らかにし、事業に対する意見や要望も踏まえ、これからの学外ボランティア事業の進め方について考察した。対象者は、事業に参加し半年後のOB会に出席した学生11名（3年生6名、2年生4名、1年生1名）である。同意を得た後、半構成的面接を行い、得られた逐語録から分析を行った。その結果、思考の変化では【自己成長／自己理解】【看護への気付き】【他者理解】【人間関係への気付き】【日常生活への気付き】の5つがあげられ、行動の変化では【自己の行動パターン】【社会性の向上】【リーダー／メンバーシップ】の3つがあがった。きっかけとなったことについては【(特定のものはなく)事業全体】【現地での体験】【事業の進め方】【大学内での体験】であった。学外ボランティア活動の進め方については【参加時期】【参加条件】【方法】に関する意見があげられた。今後は、これらの結果をもとに、学外ボランティア事業が容易にできる仕組みづくりのための実践研究を行う必要性が示唆された。

キーワード：ボランティア、学外活動、東日本大震災、学生

* 福岡女学院看護大学 ** 訪問看護ステーションアトラス福岡

I. はじめに

現代の若者は、携帯やスマートフォンを利用したコミュニケーションが中心となり、対人コミュニケーションが希薄になる可能性が潜んでいる。船津（2006）も言葉によってなされる自己表現が次第に減りつつあると述べている。ボランティア活動は公共活動への社会参加であり、人とのコミュニケーションが必須となる。よって、言葉による自己表現の機会が少なくなっている若者には、教育的価値が高いと考える。

しかし、強い個人を求める経済思潮にあって、競争に勝つための個人主義的な意識が強くなってきている今、若者が社会や人となつなうことが難しくなっているのではないだろうか。立田(2004)は、人はお互い助け合って生きていくものであり、社会はそのような相互扶助で成立していくことを理解す

ることが、若者の心身の健全な発達や、社会基盤成立のためにも必要である。だからこそ若者の社会奉仕やボランティア活動が求められていると述べている。

このような背景を踏まえ我々は、2011年3月11日に発生した東日本大震災に対して、2012年8月に復興支援ボランティアスタディツアー（以下、事業）を企画し、実施した。その一連の過程については第一報で報告している（酒井ら、2013）。

このようなボランティア活動が学生へ好影響をもたらすことは既に明らかになっている。我々の事業においても、参加学生と災害復興支援を継続していく中で、“ボランティア経験が、その後も継続して授業や実習等に好影響をもたらしている”という発言をよく耳にした。そこで、これを記録に留めておく必要性を感じたが、カリキュラムの関係で各学年を同時に集めることができずにいた。事業実施か

ら約半年たった翌年4月に時間の確保ができたため、グループインタビューを実施した。

医療に関する災害ボランティアの先行文献では、経験直後の学習効果をまとめたものが多く、経験から半年たった後も成果が継続しているものは見当たらなかった。また、単なる学びとしての報告が多く、何がきっかけでその後の思考や行動に影響をもたらしたのかについて言及しているものは少なかった。

II. 研究目的

事業終了後、半年たった学生の語りを通して、思考や行動にどのような変化をもたらしたのか明らかにする。また事業のどのようなことがきっかけで、それらの変化をもたらしたのかを明らかにし、学生の事業に対する意見や要望も踏まえ、これからの学外ボランティア事業の進め方について考察する。

III. 研究方法

事業概要

現地滞在期間は2012年8月4日～8月10日。主には、仮設住宅入居者への健康支援、被災者宅の復旧活動および生活支援等を行った。学生は「自ら気づき考え実行する」を合言葉に、事業前中後と一貫して積極的かつ主体的な行動を行い、日々、活動を振返るディスカッションの場をもった。事業の詳細は、第一報を参照されたい(酒井ら, 2013)。

対象者

A看護大学看護学部看護学科の学生で、事業に参加した20名の内、半年後のOB会(※1)に参加した学生11名(3年生-6名、2年生-4名、1年生-1名)である。

※1:OBとは、Old Boyの略で、卒業生・同窓生という意味があるが、本事業では“参加した学生と教員が集い語らう場”を「OB会」を称していた。そこで本論中でも、この名称を使用する。

調査日時

2013年4月5日、約1時間

調査方法

半構成的面接法によるグループインタビュー調査である。設問は「思考や行動にどのような変化をもたらしたのか」「(その変化は)事業のどのようなこ

とがきっかけになったのか」「学外ボランティア活動の進め方」の以上3点である。

データ収集方法

1グループ3～4名の学生で、それぞれのグループに教員が2名入った。尚、グループは活動内容、学年による偏りがないように編成をした。

分析方法

インタビューでの語りは、参加者の承諾を得てICレコーダーに録音して記述データにおこした。その逐語録から、本研究の目的に沿って言葉を抽出し、内容が一文一意味となるようにコード化した。さらに言葉の持つ意味の類似性により、カテゴリーへの抽象度を高められるよう、コード化した一文を付箋紙に書き、分類を行った。研究の信頼性を高めるために、数人の研究者で分類の内容をつき合せ、検討した。

倫理的配慮

本研究は所属看護大学の倫理審査委員会承認を受けた。インタビューを行う前に研究の趣旨を説明した文書と同意書もちいて学生に説明を行い、同意が得られた学生の逐語録を研究対象とした。研究への同意は学生の自由意思によって行われるものであること、収集データは研究目的以外に使用せず、匿名性を確保することを説明し、了承を得た。

IV. 結果

学生11名(100%)に同意が得られた。データ起こした文章数223のうち、感動詞や形容詞など、それ単独では前後のつながりが分からないものは除き、一つの文章として意味を持つ196を研究対象とした。以下、得られた結果について【 】はカテゴリーを表し、「 」はコードを表す。

1. 思考や行動にどのような変化をもたらしたのか

(表1参照)

思考の変化では【自己成長/自己理解】【看護への気付き】【他者理解】【人間関係への気付き】【日常生活への気付き】の5つがあげられ、行動の変化では【自己の行動パターン】【社会性の向上】【リーダー/メンバーシップ】の3つがあり、計8つのカテゴリーが抽出された。以下、詳細を述べていく。

まず【自己成長／自己理解】では、「これからの生き方を考えるきっかけになった」「今できることを精一杯やろうと思った」「看護だけでなく人として学ぶ機会となった」などの発言があった。【看護への気付き】では、「生活や暮らしの焦点をあて看護する」「相手の関係において力が注げる看護は素晴らしい」などを考えていた。【他者理解】では、「人は誰も人には言えない悲しみや辛さがある」「いつも相手の立場になって考えることが必要」「相手の喜怒哀楽を敏感に感じるができるようになった」などだった。【人間関係への気付き】では、「現地の人から教えてもらうことが多かった」「その後も現地の人とつながっていられることが嬉しい」「傾聴する

ことの大切さを知った」などの発言があった。【日常生活への気付き】では、「普段の生活が幸せであることに気付けた」であった。

次に行動の変化での【自己の行動パターン】では、「人見知りが解消された」「順序を考えて行動するようになった」「目的をもって行動するようになった」などがあった。【社会性の向上】では、「震災報道が他人事ではなくなった」「いろんな視点から物事をみる必要性を感じた」などの発言だった。【グループ／メンバーシップ】では、「グループ内での自分の役割を考えるようになった」「我慢せず自分の意見を伝え相手の意見を聞くようになった」などがあった。

表1 「思考や行動にどのような変化をもたらしたのか」

思考や行動の変化		
カテゴリー	コード	
思考の変化	自己成長／自己理解	困難があっても乗り越えられる自信がついた。 自分の生活や考え方を改めて振り返ることができ、これからの生き方を考えるきっかけになった。 看護だけでなく人として学ぶ機会となった。 今が大切。今、自分にできることを精一杯やろうと思った。 発表することで自分の考えが整理された。 (弱い自分だったけど) もっと強くなろうと思った。 あの時の感動がよみがえり、また頑張ろうと思った。 自分で直接見て考えてから、意見を言わなければいけないと感じた。結局のところ、大切なことは人から教わるのではなく、自分の目で見て感じる必要がある。それが自分の自信にもなる。
	看護への気付き	地域看護や在宅看護に興味をもった。 保健師の仕事に魅力を感じ興味をもった。 生活や暮らし（ゴミ箱、郵便受け、洗濯物など）に焦点をあて看護する必要性を感じた。 社会保障制度を知ることが、看護を行う上で大切である。 健康教育の留意点や考えるべきポイントが理解でき、その後の実習で活かすことができた。 看護は点滴とか注射とかではなく、相手との関係性において力を注げるところが素晴らしい。
	他者理解	ゴミ（ガレキ）がその人にとっては大切なものであることを知り、いつも相手の立場になって考えることが必要であることを知った。 人は誰も、人には言えない悲しみや辛さを抱えていることを知った。 相手の喜怒哀楽に敏感に感じるができるようになった。 人を知ろうとする前に、自分自身を知らないといけない。 人の意見から学ぶことが多かった。 先輩後輩同級生の素晴らしさ（学生の気配りや機敏な行動）を再発見できた。
	人間関係への気付き	自分がしたことはわずかで、現地の人に逆に教えてもらい学ぶことが多かった。人と人とのつながりの大切さを感じた。 現地の人の心情に触れ、傾聴することの大切さを知った。 学年を超えた交流が、その後も続いた。 他大学生との交流がその後も続き、いろんな情報がもられた。
	日常生活への気付き	普段の生活（布団の上で寝られて、温かい食事が食べられる）が幸せであることに気付けた。
行動の変化	自己の行動パターン	順序を考えて行動するようになった。先のことまで考えて行動するようになった。 人見知りが解消された。 目的をもって行動するようになった。 何事にも積極的になった。（一歩踏み出せる勇気をもてた。） 報連相をするようになった。 一つ一つの言葉を大切に、考えて発言するようになった。 人前で話すことができるようになった。自分の意見を伝えなくてはと思うようになった。 自分の経験を人に伝えるには、何度も練習し、自分自身もよく理解していなければならない。
	社会性の向上	震災に関する報道が他人事ではなくなり、関心ももてるようになった。 いろんな視点（政治経済）から物事をみる必要性を知り、視野が広がった。看護以外の分野にも関心をもつことで、看護自体にもいろんな気づきがある。
	リーダーシップ／メンバー	グループ内での自分の役割を考えるようになった。 グループ内で我慢せず自分の意見を伝え、同時に相手の意見を聞くようになった。

2. 事業のどのようなことがきっかけになったのか

(表2参照)

思考や行動に影響を及ぼしたきっかけは、【現地での体験】だった。具体的には、「仮設住宅訪問」や「泥だしやガレキ撤去」などの現地での活動だった。他にも「被災者との交流」や「他大学との交流」もあげられた。

「日々のミーティング」や「“自ら気づき考え実行する”学生主導型」の【事業の進め方】、「チャペルや学祭等での活動報告」や「OB会の開催」などの【大学内での体験】を、きっかけになったとこたえる者もいた。

また、特定のきっかけをあげずに【事業全体】が思考や行動に影響を及ぼしたとする者もいた。

表2 「事業のどのようなことがきっかけになったのか」

きっかけになったこと	
カテゴリー	コード
事業全体	
事業の進め方	“自ら気づき考え実行する”学生主導型 日々のミーティング (ディスカッション)
現地での体験	仮設住宅訪問
	健康教育
	泥だし、壁掃除、ガレキ撤去
	現地を見て触れて感じたこと
	普段とは違う環境と生活スタイル
現地での生活	学生と寝食を共にすること
被災者との交流	家をなくし家族を亡くすなど辛く悲しい経験をした方との交流。そんな方々に、支えられ励まされた。
学生間の交流	複数学年で合同参加 意見の対立
他大学生との交流	
大学内での体験	チャペルや学祭等で活動報告 OB会の開催

3. 学外ボランティア事業の進め方について

(表3参照)

事業の一連の過程を振り返り、学生が考えた学外ボランティア事業の進め方には、主に【参加時期】【参加条件】【方法】に関するものだった。【参加時期】については、3年生の実習が有意義なものになるとの理由で「低学年のときに実施できたら」とこたえていた。一方で【参加条件】については「全学年を対象」にして、学年間で学びを共有したいとのことだった。【方法】については、教員がお膳立てするのではなく「学生主導にする」ことと、「活動後は(参加者同士が)ディスカッションできる場を設ける」こと、更に「(参加者同士で再び活動を振り返る)OB会を定期的に開く」などがあげられた。

表3 「学外ボランティア事業の進め方についての意見や要望」

学外ボランティア事業の進め方	
カテゴリー	コード
参加時期	低学年で実施できたなら、3年生の実習が有意義なものになると思う。
参加条件	全学年を対象にする。
方法	教員の授業は一方的なものが多い。もっと学生主導にする。活動後はディスカッションできる時間を設ける。やったらやっただけで終わらない。OB会を定期的に開く。

V. 考察

1. 思考や行動にどのような変化をもたらしたのか

影響をもたらしたことの多くが、【自己成長/自己理解】【自己の行動パターン】であった。これについて北川(2000)は、ボランティア体験の効果として、学生が悩み、考え、行動し、反省できるようになったと述べている。すなわち、自己を見つめ、これからどのように物事を思考し行動すればよいかを、改めて考える機会になったと考える。

【看護への気付き】については、本事業の特徴ともいえる。被災者の生活の場にお邪魔し、直接、被災者から率直なお話も聞かせていただいた。このような体験から「暮らしに焦点をあて看護すること」「社会保障制度を理解すること」「相手との関係性において力が注げる看護は素晴らしい」などの発言があったと思われる。これらの気付きは、ボランティアの活動内容によっても異なってくると考える。

【他者理解】【人間関係への気付き】については、「人は誰しも、人には言えない悲しみや辛さを抱えている」「人とのつながりの大切さを感じた」「人

を知ろうとする前に自分自身を知らなければならない」など、貴重な学びを得ていた。いずれも人との交流の中で生まれたものである。内海（2001）は、いろいろな人とふれあうこと、さまざまな人の立場を理解することは、これからの社会を作り上げていくために重要であると述べている。事業に参加した学生も、被災者はもちろんのこと、学生間、また他大学の学生からも大きな影響を受けたと思われる。

行動の変化であげられた【社会性の向上】【リーダー／メンバーシップ】では、「看護以外の分野にも関心をもつ」「グループ内での自分の役割を考えるようになった」等の発言があった。これについて北川（2000）は、学生はボランティア体験において、自分の役割を理解し達成しようとする責任感ができたと述べている。本学学生も、集団における自分自身の役割や、社会人としての責任を考える契機になったと考える。

以上のように、半年たった時点でも、学生は思考や行動の面で多くの変化をもたらしたことが明らかとなった。半年たっても変化をもたらしたきっかけについては、次項の2や3で述べる。

2. 事業のどのようなことがきっかけになったのか

【現地での体験】が、その後の思考や行動に影響を及ぼしたことについては、（柏葉，2012；富澤，2011）も同様のことを述べている。特に今回は、未曾有の大震災が起こった被災地での活動ということもあり、その影響は大きかったといえる。【現地での体験】の中でも「現地での生活」がきっかけとしてあがっているのは、避難所生活さながらの生活様式（容易に入浴できず、温かい食事が食べられない、寝袋を並べ雑魚寝する）が影響していると思われる。内海（2001）は、ボランティアをする人々を理解するためには、彼らと向かいあうだけでなく、共通の体験をすることで、その生活を理解し、その行為を記録し、行為によって語らせることが必要だと述べている。今回、宿泊場所が、集会所や保育所旧舎だったため、そのような生活様式をとらざるを得なかった側面もあるが、生活体験から被災者の気持ちに寄り添わせたいとする教員側の意図が有効であった。

【現地での体験】の「被災者や学生間、そして他大学生との交流」においても、その影響力は大き

かったといえる。これについて田中（2011）は、自己形成やアイデンティティ獲得には他者や社会集団との関係が重要であると述べている。つまり、ただ現地に赴くだけでなく、そこで出会う人々との交流の中にこそ学びがあるのである。

「日々のミーティング」や「“自ら気づき考え実行する”学生主導型」の【事業の進め方】が、きっかけになったと応える者もいた。山本（2007）は、ボランティアは知恵を働かせ、いろいろな工夫をする必要があると述べている。学生にとって、成績評価を気にせず、失敗をも良しとするボランティア活動こそ、自由に考え行動することができる絶好のチャンスだといえる。

3. 学外ボランティア事業の進め方について

【参加時期】については、学生の意見にもあるように、1・2年のほうが、3年生から始まる実習に備えることができるため、時間的にも余裕がある学年ということで好都合だといえる。しかし災害看護学など机上の知識や技術を学んだ後の3・4年生でも、学習したことを現地で応用・発展することができるという点で適していると考えられる。つまり、学生自身の強い参加意志と決意さえあれば、どの学年でも有意義なものとなり得ると考える。【参加条件】の中でも、学年を超えた交流の大切さを感じ「全学年を対象」と意見していることから、そのことは明確である。伊丹（2008）の研究でも、学生の要望として他学年と交流することはよい刺激になるので機会を増やしてほしいと述べられていた。

【方法】であがった「活動後は（参加者同士が）ディスカッションできる時間を設ける」「（参加者同士で再び活動を振り返る）OB会を定期的に開く」など、学生間の学びを共有する機会をもつことの必要性については、伊丹（2008）、増田（2004）、大谷（2011）も同様に述べられていた。前述した結果でも、「学生間の交流」がきっかけとなり、その後の思考や行動に変化をもたらしていた。更に末永（2005）は、学生たちはボランティア活動を通して体験を共有する場を求めており、教員はそのような場所の設定や体験の意味づけの手助けが必要であると述べている。つまり事業の方法として、学生間の話合いの場を設けるだけでなく、彼らの発言を補足したり、まとめたりするなどの教員サポートも重要であると

考える。

また「学生主導にする」という【方法】をあげていた理由には、「教員の授業は一方的なものが多い」ということからだった。すなわち普段の授業が、教員主導で進められていることへの学生からの忠告である。学生主導型の【事業の進め方】が、その後の思考や行動に影響していたことについては、前述したとおりである。学外ボランティア事業にとどまらず、普段の教授活動においても、教員は多くを語らず、学生の力を信じて後方支援にまわることの大切さを再認識させられた学生の一言であった。「活動後はディスカッションできる場を設ける」ことや「OB会を定期的に開く」という【方法】は、学生の思考や行動の変化を確かなものにし、また他者との連帯感も生んで、その後の意欲継続にも欠かせないと考ええる。特にOB会は、ボランティアにより得られた学びを、その後も継続し活かしていくための方法として有効であると考ええる。

VI. 結語

教員が考える以上に、学生は多くのことを思考し行動していた。東日本大震災ボランティアスタディツアーから半年後、改めて聞いた学生の語りから、そのことが明確になった。更に、事業の何がきっかけで、そのような学びを得られたのかを明らかにすることで、今後の学外ボランティア活動の進め方についても、示唆を得ることができた。中でもOB会は、ボランティアでの学び継続・維持していくために欠かせないことがわかった。

看護職は、自分が経験したことのない病いや障がいに苦しむ人々に対し寄り添わなければならない。だからこそ本学の教育理念にある、“豊かな感性と知性を備えた人材育成”が大切になってくる。では“豊かな感性と知性”はどのように養われていくのか。まさしく、その答えが本報告書の中にあっただけではないだろうか。つまり、学生に多くの経験を積ませる仕掛けづくりこそが、看護教員には必要なのである。日常とは違う環境の中で、普段、交わることのない人々と、活動を共にする場を提供するのである。これについて森田(2010)も、学外体験学習が学生にとって看護の喜びや気づきを得るよい機会

となっており、学習への動機づけ、意欲を維持するためのインセンティブになっていると述べている。

「結局のところ、大切なことは人から教わるのではなくて、自分の目で見て感じる必要があるのですね。」これはインタビューの中で、ある学生が語った言葉である。すべては、この言葉に集約されている。

課題は学外ボランティア事業を進めていくための時間・費用・マンパワーである。現行のカリキュラムでは難しく、学生も教員も疲弊してしまう。ある大学では、ボランティア活動を単位として認めているところもあり(富澤, 2012)、文科省も「各大学等の判断により、ボランティア活動が授業の目的と密接に関わる場合は、ボランティア活動の実践を実習・演習等の授業の一環として位置づけ、単位を付与することができる」と通知した(文科省, 2011)。

学生の豊かな感性と知性を育むことができる学外ボランティア事業を、本学でも日常化し、多くの学生にその機会が与えられるよう、これから模索していきたい。

研究の限界と今後の課題

本研究は、一施設・一事業を対象にしており、一般化には限界がある。今後は、今回明らかとなったことを裏付ける意味でも、学外ボランティア事業が容易にできる仕掛けづくりや仕組みづくりのための実践研究を行う必要が示唆された。

謝辞

本研究や活動にあたり、多大なご協力とご支援をいただきました各関係機関の皆様へ深く感謝申し上げます。また、インタビューにご協力いただいた看護学生の皆さんに感謝申し上げます。

【文献リスト】

- 藤本美雪.(2011). いわて GINGA-NET プロジェクトに引率教員として参加して. 青森保健大学雑誌, 12, 95-98.
- 船津衛.(2006). コミュニケーションと社会心理. 11, 北樹出版.
- 池田理知子.(2006). 現代コミュニケーション学. 249, 有斐閣.

- 伊丹君和也.(2008). 未来看護塾の活動および人と関わる体験が看護学生へもたらす効果. 人間看護学研究, 6,49-61.
- 柏葉英美他.(2011). 看護基礎教育における災害ボランティア体験の効果 - 参加した学生のアンケートより. 看護教育, 52(10),852-855.
- 川原礼子.(2011). 災害看護, それはこれまでの人生を問われるもの 東日本大震災の復興および被災者支援活動から. 看護教育, 52(7),544-550.
- 北川かほる他.(2000). ボランティア体験が学生にもたらす教育的効果. 鳥取大学医学部短期大学紀要, 32,27-34.
- 木内祐二.(2012). 医療に携わろうとしている学生たちが支援活動から学んだこと. 日本医学雑誌, 141(1),88-89.
- 増田信代.(2004). 看護学生のボランティア体験実習に対する意識. 日本看護学会誌, 14(1), 45-50.
- 文科高第7. 東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について(通知). 2011-4-1. (http://www.mext.go.jp/a_menu/saigaijohou/syousai/1304540.htm)
- 森田孝子他.(2010). 参加型地域公開活動に参加した学生の学習効果「看護の日に当たり健康を考える」学外実地体験に参加した学生の調査から. 上武大学看護学部紀要, 6(1),28-37.
- 大谷尚子他.(2011). 東日本大震災と看護学生のボランティア - 保健室のあねさんの活動で体験したこと -. 聖母大学紀要, 8,43-50.
- 酒井康江他.(2013). 学外ボランティア事業の進め方～東日本大震災後の復興支援ボランティアスタディツアーの実践報告(第一報)～. 福岡女学院看護大学紀要, 4,35-41.
- 末永香他.(2005). 看護学生のボランティア体験における学びとその支援. 千葉県立衛生短期大学紀要, 24(1),29-37.
- 田中雅文.(2011). ボランティア活動とおとなの学び. 19, 学文社.
- 立田慶裕.(2004). 参加して学ぶボランティア. 122, 電算印刷株式会社.
- 富澤弥生.(2012). 被災地の大学における看護学生によるボランティア活動の実際月刊ナーシング, 32(3),129.
- 内海成治.(2001). ボランティア学のすすめ. 116, 昭和堂.
- 山本保博.(2007). 災害時のヘルスプロモーション ことと身体のよりよい健康をめざして. 91, 荘道社.